

人文学部プロジェクト活動報告

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています。（右は代表者。）

山口国文	林 伸一
英語と英米文学	太田 聡
山口大学独仏文学	井上三朗
山口地域社会研究	横田尚俊
アジアの歴史と文化	阿部泰記
〈教え、学び、分かること〉の基礎的探求	ジュマリ・アラム
やまぐち学推進プロジェクト	田中誠二

各プロジェクトの、今年度の活動報告を掲載いたします。

山口大学人文学部国語国文学会

今年度も、例年通り、研究プロジェクト助成にかかる人文学部戦略的経費の配分を受けつつ、山口大学人文学部国語国文学会員納入の学会費に基づき、下記の事業を推進した。

第35回山口大学人文学部国語国文学会研究発表会・総会

2010年5月9日（日） 9:30—16:30

日本語学分野では島田かおり「日本語学習者の誤用分析—中国語母語話者の事例研究—」ほか8名による研究発表、日本文学分野では古舘亜佳里「『雨月物語』「浅茅が宿」における宮木像」の研究発表があり、それぞれ活発な質疑応答が行われた。参加者は総勢72名で、その内訳は、人文学部在学学生46名・学内教員7名・人文学部卒業生15名・一般4名であった。

第25回山口大学人文学部国語国文学会研究懇話会

2010年12月4日（土） 14:00—16:00

平成19年度に日本語文化論コースを卒業し、

現在、島根県立浜田高等学校に学校司書として勤務している飯塚久美氏を招いて、「学校司書という仕事」という演題による講演会を開催した。学校司書になるまでの道のりと、学校司書としての日々の取り組みについて講演され、その後、参加者からの質問に即しつつ、司書という仕事の現状と課題、また就職の全般について、参加者全員で意見交換を行った。参加者は総勢46名で、その内訳は、人文学部在学学生31名・人文学部教員6名・人文学部卒業生7名・一般2名であった。

『山口国文』第34号の編集・刊行

上掲研究発表会での口頭発表を基礎とした論文8本・新刊書紹介1本・発表要旨1本を、下記論題の順に掲載し、3月31日の発刊を目指している。

日本語と中国語の同形語の意味・用法の差異について

—漢字熟語の使用に関する調査結果の分析—

日本語学習者の誤用分析

—中国語母語話者の事例研究—
島田 かおり
予備教育における日本語学習者に求められる読解能力

—マレーシアマラヤ大学予備教育部の事例をもとに—
吉川 達
大学院予備教育としての日本語試験対策

—外国人留学生のための特別支援プログラムについて—
木村 直美
漢字イメージマップの検討

—「鬼」を素材にして—
佐々木 翔太郎
制限時間内の発表力向上のためのエクササイズ

—大学生対象の構成的グループ・エンカウンターの実践研究—
深見 知南
参加者の振り返り記述をもとにした日本語授業の質的研究

—新聞記事をめぐっての大学生の談話分析—
守政 昭浩
期待される授業に関するマップ調査研究

—初年次生と専門生の比較—
衛蕾・林伸一
〔紹介〕高崎淳子著『中国旅行詠の世界』
尾崎 千佳

第35回山口大学人文学部国語国文学会研究発表会発表要旨
古舘 亜佳里
(尾崎 千佳)

『英語と英米文学』

本誌は、学内同人による紀要として1965年に創刊されたものである。年1回の発行を続けて、今年度で第45号を迎えた。本誌創刊時の会員は、山口大学文理学部、教育学部、教養部の英語関係教員で、編集責任は「文理学部英米文学研究室」となっていた。現在では、人文学部英語学・英米文学コース所属の教員を中心に、教育学部、

経済学部、工学部、留学生センター所属の英語関係教員が会員となって、英語学、英米文学、英語教育、英語圏文化・その他に関する論文を投稿している。

山口大学の英語関係教員（英語分科会メンバー）は、日ごろから、共通教育の英語の授業担当に関して緊密な連携ができていたが、本誌の発行ということにおいても、学部を越えた協力体制が十分にできあがっている。そして、会員の中から定年退職者が出る年度には、本誌は「退職記念号」として刊行され、英語関係仲間としての送別会の席でその記念号の贈呈が行われる。今号は、理工学研究科の Michael Higgins 教授の退職記念号である。そして、Higgins 教授の紹介文・業績表などに続いて、6編の論文・研究ノート・作品が掲載される予定である。このうち、人文学部所属の教員の論考は以下の3編である。

1. Hitoshi Akahane “A Phase-Theoretic Analysis of Object Omission”
 2. 宮原一成「スピヴァクは読まれることができていたのか——特に日本において」
 3. 池園 宏「*The Mill on the Floss*と *Jane Eyre*——二つの自伝的教養小説を巡って」
- なお、人文学部から支給された研究プロジェクト助成金は、本誌の印刷・製本費用の一部に充てられる。

(太田 聡)

『独仏文学』

山口大学のドイツ語・フランス語関係の教員を会員とし、元教員を準会員とする山口大学独仏文学研究会が年一回発行する学術誌である。2010年度の第32号に掲載される論文は以下のとおりである。

ゲルマン諸言語の名詞句構造 下寄 正利
ハインリッヒ・フォン・クライストの『聖ドミ

ンゴ島での結婚』 小粥 良
Zur Verfilmung des Kinderromans für Erwachsene
von Erich Kästner „Das Doppelte Lottchen“ und
zwei Remakes. Ein Vergleich von Originalfilm und
zwei Remakes Felicitas Dobra
『ファウスト』脚注の試み(25) 渡辺 信夫
英語の統合型現在分詞に対応するフランス語
の非定形動詞について 武本 雅嗣
福永武彦とジュリアン・グリーンにおける不可
能な愛の主題(1) 井上 三朗

今年度は小粥良(編集長)、下寄正利、武本雅
嗣が編集委員を務めた。

(武本 雅嗣)

山口地域社会研究

「山口地域社会研究」プロジェクトは、山口
地域社会学会の研究活動より成り立っている。

2010年には、3月、7月、11月と、3回の研
究例会を開催した。コミュニティや時間意識、
高齢者、地域政治などをめぐる計9本の研究報
告が行われ、その内容をめぐって、報告者とフ
ロアとの間で、活発な質疑応答・討論が展開さ
れた。

そのうち2本の報告は、台湾の研究者による
ものであり、福祉サービスや学校教育の現状を
めぐり、東アジア地域での比較調査研究に向け
た問題提起もなされた。

また、今年度も学術雑誌『やまぐち地域社会
研究』(第8号)を刊行する予定であり、現在、
編集作業を進めているところである。

(横田 尚俊)

『アジアの歴史と文化』15 輯

本年度も山口大学人文学部にゆかりのある研

究者によって珠玉の学術論文を投稿していただ
いた。以下にその概要を記して本号の紹介とし
たい。

1. 近藤喬一(山口大学名誉教授): 釜を被る死者

貴州博物館の梁太鶴は「赫章可楽墓地套頭葬
研究」という論文を公にし、夜郎の墓葬の風習
ではないかと思える套頭葬の実態をかなり明ら
かにした。本稿では、遺骸に被せるという意味
で西周以後、玉衣を含めると東漢代まで用いら
れた綴玉覆面か東北地区の布袋をすっぽり被せ
るあり様を考察した。(1. 鉢かづき 2. 副葬され
た銅鼓 3. 腰坑の三種類 4. シャーマンの図像
5. 夜郎と滇—西南夷の人々)

2. 富平美波(山口大学教授): 方中履『切字釈疑』

「字母増減」の条を読む(「切字釈疑」第4節
訳注)

拙稿「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を
読む(「切字釈疑」訳注1)・「切韻当主音和」の
条を読む(「切字釈疑」訳注2)・「門法之非」
の条を読む」に続き、第4節「字母増減」の部
分について、本文の校訂と訳注を作成し、内容
について若干の考察を加えた。

3. 松尾善弘(元山口大学教授): 漢詩文の乱読を 排す

性質を異にする両言語(漢語・日本語)を漢
字という共通項に託して両言語で表記し、詩文
の内容を合致させるのは容易なことではない。
そこにはさまざまな誤差や曲解が生ずるのは
いわば必然でもあった。時代はすでに正攻法に
よる漢詩文解釈と副次的手段としての漢文訓
読法を要請していると思うのである。(1. 「楓
橋夜泊」の解釈をめぐって 2. 「寒山子詩」の
解釈をめぐって 3. 「漱石漢詩(二首)」を読む
4. 漢字ならべ詩を論ず 5. 『論語』読みの『論
語』知らず 6. 漢字・漢語・漢文論)

4. 桂勝(武漢大学教授): 試析《管子》“四維” 價值觀的邏輯建構

春秋時代に斉国の価値観が樹立したのは、「周礼の樹立」、「周楽の崩壊」、「礼義廉恥の唱導」の過程を通じてであった。『管子』は何度も「守国の度」「厲民の道」の「四維」価値観が当時の中国の核心価値体系の構築に不可欠の参考意義があることを明らかにしている。

5. 胡翼鵬（武漢大学講師）：被褐而懷玉—中国隠士的形象經營与自我期许

古代の隠士が形象を創造し、自分への期待を表現する形式は多種多様であった。その中で衣服は重要な方式であった。大多数の隠士は素朴な衣装、葛巾草服、芒屨布衣が日常の服装であり、甚だしくは古着破衫、奇装異服も珍しくはなかった。これらの服装の状態は個人の経済条件や審美観念と関係してはいたが、さらに重要なことは、隠士が外在的な衣服形象と内在的な品格節操の強烈な対比、すなわち「褐を被って玉を懐く」ことを希望していたことである。隠士は日常行動の中で葛巾草服を人に示すばかりでなく帝王、官貴等の訪客との交流の中でも山衣野服の装着を堅持していた。これによって隠士は「返璞帰真」の形象を創造し、「安貧楽道」の自分への期待を表現したのである。

6. 周麗玲（湖北大学副教授）：大陸近十年来出土樂器簡介

1990年から2007年にかけて、中国大陸の各地では相継いで大量の古代の樂器が出土し、音楽文化史、音楽考古学ないしは文化史の深化研究に新しい豊富な材料を提供した。これを鑑みて、筆者はこの間の重要な発掘成果を選集整理した。

7. 林淑貞（中興大学教授）：〈詩概〉論風格之表述方法、對象與審美觀照

晩清の劉熙載の詩学理論について、『芸概』中の「詩概」によってその論述風格の表述手法、詮評対象、審美意涵等の内容について探究した。その一、表述風格の言語形式が多面的な議論、説理、叙述、比較、引用、排比、摘句等の方式でなり、取象の方式に具象、抽象、意象の三型があることを明らかにした。その二、表述対象

として詩歌、時代、詩家、体派、体裁、題材等の六項の内容を鑑定することを明らかにした。その三、審美觀照の方向として作者の主体的な心靈の表抒、読者の審美心靈の感蕩、客体作品の示現等の三位一体の主客交融方式が体契会悟することを明らかにした。結論として、「詩概」の意義が、体裁風格体要を論じて創作の矩度を指導し、各家の詩人の風格を論じて一己の偏失をただすべきとし、さらに典型風格を確立して型範としたところにあることを述べた。

8. 田梅（山口大学教授）・邢永鳳（山東大学副教授）：井上靖の『孔子』と『論語』

『孔子』は井上靖が亡くなる前に書き上げた最後の長編小説であり、彼の作品の中で重要な位置を占めている。この作品は弟子が師の孔子のことを語る形式を取って、弟子の目に映る孔子を造型した。八十歳に達した作者は、人生の思索や世界平和にたいする祈願などを、孔子や語り手の弟子を通じて読者に語った。『孔子』の創作には『史記』あるいは『春秋左氏伝』も参考にしているが、主に『論語』に依拠している。よって本研究では井上靖の『孔子』と『論語』の関係について考察した。

9. 馬彪（山口大学教授）：古代中国帝王の巡幸と禁苑

「政」の「まつりごと」という訓は、祭りが社会統制のための行事であった日本古代の祭政一致を現しているが、中国の古代も同じだった。「政」（まつりごと）を都で行うことはどこの国や民族も当然なことであるが、古代中国の帝王たちはなぜ巡狩や巡幸という形で行ったのか。彼らは巡狩や巡幸先のどこで政治活動を行ったのか。本稿では、巡幸と禁苑の変遷から古代中国帝王の政（まつりごと）について検討した。

10. 阿部泰記（山口大学教授）：河南の宣講書『宣講管規』六卷

清朝が郷約制度の中で行った聖諭宣講は清末に至って善堂が主催して因果応報説話（案証）が編纂されるようになった。その先駆が湖北潜

江の王文選編『宣講集要』十五卷（一八五二）であり、続いて宣統二年（一九一〇）に河南洛陽の周景文が編纂したのが『宣講管規』六巻である。本書は『宣講集要』などの先行する宣講書に取材し、従来の案証より歌唱を多く用い、特に歌唱が人を感動させる力を十分に発揮させることによって民衆教化を図ろうとしたことが伺える。また通俗小説を案証に改編することも試みた。本稿ではこうした『宣講管規』における通俗性の強化について論じた。

（阿部 泰記）

〈教え、学び、分かること〉 の基礎的探究

（山口大学哲学研究会）

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学、思想系の教員を中心とした組織で、会誌の発行、合評会、研究発表会などの活動を行っています。現在正会員（学内の常勤教員である会員）は12名ですが、そのうち、人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、柏木寧子、田中均、豊澤一、藤川哲、古荘真敬、脇條靖弘の6名です。また、名誉会員（過去に山口大学に所属していたことのある学外の会員）16名のうち、元人文学部の教員は、上野修、遠藤徹、奥津聖、加藤和哉、木村武史、武宮諳、外山紀久子、林文孝、頼住光子の9名です。なお、今年度より、正会員として、教育学部の村上林造、佐野之人の2名が入会されました。

『山口大学哲学研究』第17巻が2011年3月に発行される予定です。掲載予定の論文は以下の4本です。

- 佐野之人「今日に生きるヘーゲル自然哲学」
- 村上林造「共通教育科目での対話の試み—学生とともに漱石『坊っちゃん』を読む」
- 木村武史「サステナビリティ問題の時間論：混在する過去・現在・未来」

●ジュマリ・アラム「宗教とは何か — 「つながり」 として見た場合」

山口大学人文学部の予算より支給された「平成二十二年度研究経費に係る戦略的経費(研究プロジェクト助成)」は、会誌印刷、製本の費用の一部に充てました。本年度の運営委員は、柏木寧子、田中均、青山拓央（時間学研究所）の3名が担当しました。

（脇條 靖弘）

やまぐち学推進プロジェクト

本プロジェクトは、山口地域の歴史的・文化的な固有性と普遍性を学問的に解明し、その成果を学内・県内・全国へ向けて発信することを理念・目的としている。

プロジェクトメンバーは、人文学部9名・教育学部2名・経済学部1名・埋蔵文化財資料館2名の合計14名であり、人文学部を中心としつつも、文系の部局を跨ぐ連携プロジェクトである。分野は、日本史、考古学、国語・国文学、民俗学に広がっている。

本プロジェクトの立ち上げは、10年ほど前に人文学部の外部評価で、当時の山口県副知事さんから、「人文学部で地元のことを研究するやまぐち学をやってみたらどうか」と提案をうけたことがきっかけである。本格的に活動を展開しはじめたのは、平成16年に加藤紘学長が研究推進体を募集し、それに応募して学長の認定を受けてからである。この第1フェーズの研究推進体の一つ「やまぐち学構築プロジェクト」は、機関誌『やまぐち学の構築』を毎年発行し、毎号7～8編の論文を掲載し、学内外に発信してきた。人文学部では本プロジェクトは、異文化研究とともに重点研究領域として分野別評価を受けてきたし、また、平成21年3月の「中期計画目標期間に係る業務の実績に関する評価結果」で、「やまぐち学」を構築していること

は、(中略) 地域の特性を活かした研究を推進している点で、特色ある取組であると判断される」と、山口大学全体の中期計画の研究の「特色ある点」として評価された。

昨年10月に、第2フェーズの研究推進体の一つとして学長に認定され、第1フェーズ5年間に引き続いてのつぎの5年間は始まった。この年度は、やまぐち学の構築6号の発刊(7編の論文を掲載)をした。内容は、以下の通りである。

萩藩中期藩財政の研究 田中誠二

萩藩中期の山代紙 同

室積浦と佐郷島の事例にみる立浦・端浦制度の実態 木部和昭

山口大学図書館所蔵和古書分類目録

尾崎千佳

草葺き屋根の形と風土 坪郷英彦

一岡山県・島根県の草屋根葺き

職人の技術文化を中心にして一

山口県法仙庵遺跡の土器 中村友博

美濃ヶ浜式土器の再検討(2) 横山成己

あらたに第1回はやまぐち学シンポジウムを開催した(人文学部共催、山口市教育委員会後援)。「萩藩研究の新展開」と題して3人の報告と討論を行い、盛況であった。内容は次の通り。

田中誠二「萩藩財政史研究の課題」

木部和昭「下関越荷方についての再考察」

森下 徹「藩領国と地域社会」

今年度も考古学を中心に、第2回のシンポジウムを企画中で、3月19日(土)に大学会館で開催予定である。

(田中 誠二)